

第30回日本腰痛学会  
2022年10月21日(金)、22日(土)

ランチオンセミナー 10

日時

10月22日(土) 12:00~13:00

会場

第5会場 アイーナ いわて県民情報交流センター  
8階「研修室812」

座長

川口 善治 先生

富山大学医学部整形外科 教授／富山大学附属病院痛みセンター長

次世代に向けて腰痛診療を考える  
-モバイルアプリの実際-

演者

松平 浩 先生

東京大学医学部附属病院22世紀医療センター  
運動器疼痛メディカルリサーチ&マネジメント講座 特任教授

次世代に向けて腰痛診療を考える  
-RWD (リアルワールドデータ) の実際  
アセトアミノフェンの腎機能への影響-

演者

徳増 裕宣 先生

大原記念倉敷中央医療機構臨床医学研究所 臨床研究支援センター長

認定単位:日本整形外科学会

日整会専門医単位 (N)1単位 必須分野 [1:整形外科学基礎]、[7:脊椎・脊髄疾患]  
(SS)脊椎脊髄病単位

共催:第30回日本腰痛学会／あゆみ製薬株式会社



# 次世代に向けて腰痛診療を考える —モバイルアプリの実際—

東京大学医学部附属病院22世紀医療センター  
運動器疼痛メディカルリサーチ&マネジメント講座 特任教授

## 松平 浩

慢性腰痛に対し推奨される介入法としては、薬物療法に加え、運動療法、患者教育、認知行動療法があるが、重要なキーワードとしては「セルフマネジメント支援」が挙げられ、これらをモバイルアプリで提供する取り組みが注目される。2021年、Sandalらは、欧米主要3臨床ガイドラインで支持されている、(1)身体活動 (2)筋力と柔軟性の運動 (3)毎日の教育メッセージを柱に、Tailored Self-management Supportをうたったスマホアプリ (selfBACK) の3か月成績をJAMA Intern Medに報告した。

我々は、「行動変容」をもたらすことを重視した会話ログにより、演者が選定した6エクササイズとマインドfulness、および教育クイズを、12週のLINEによるモバイルガイドサービス (se·ca·ide) としてコロナ禍に提供し、薬物治療単独群よりも運動恐怖と健康関連QOLが有意に改善したことを今年5月にJMIR Mhealth Uhealthで公表した (東大病院からプレスリリース)。

バーチャルリアリティ(VR)アプリの有用性もコロナ禍に検証されている。8週の没入型疼痛緩和スキルVRプログラム (EaseVRx) による認知行動的な心身両面へのアプローチが、バイオフィードバック体験を通じて自己管理を促す。Garciaらは、EaseVRxがShamVRと比較し、治療満足度や疼痛強度等のアウトカム改善が優れており、治療後3か月まで治療効果が持続する可能性をJ Painに報告した。

このようにバーチャルな慢性腰痛管理が進化しつつある。慢性化予防のための“Stay Active”教育と適切な薬物療法を腰痛診療の基軸としたうえで、次世代に向けては、バーチャルでの慢性腰痛管理がさらに発展し、評価に基づく個別化と再発予防にも配慮された「セルフマネジメント支援」が、有意義なRWDの収集とともに確立されることが望まれる。

# 次世代に向けて腰痛診療を考える — RWD (リアルワールドデータ) の実際 アセトアミノフェンの腎機能への影響 —

大原記念倉敷中央医療機構臨床医学研究所 臨床研究支援センター長

## 徳増 裕宣

近年、各領域の学会主導でレジストリが構築され、実際に行われている医療行為からエビデンスを出そうとする試みが増えてきている。今回、電子カルテを基にしたデータベースより、“現場の叡智の掘り起こし”を行ったので紹介する。

医療行為の有効性については、ランダム化比較試験を筆頭に様々な研究手法を用いて行われている。使用する統計手法も多岐にわたり、今までと違った角度からのエビデンスが多く創出されている。一方、特殊な疾患背景をもつ患者に対する治療や、有害事象に対する報告はまだ検討の余地があり、本発表にて電子診療録を基にした医療データベースの構築がどのような状況なのか、どのような利用方法があるのか皆様と共有したい。

今回の研究では、電子カルテデータを抽出して構築したデータベース、いわゆるリアルワールドデータを使用して、慢性疼痛の患者を対象にアセトアミノフェンの長期使用が腎機能に及ぼす長期的な影響を調査した。各症例の検査結果もデータベース内にすべて格納されており、主要アウトカムは、1/血清クレアチニン(SCr)で示された2年間の腎機能の変化とした。最長10年程度のフォローも可能であり、長期的なアセトアミノフェンの投与が腎機能に及ぼす影響も検討したので紹介する。リアルワールドデータの活用は、現在の実臨床での課題解決あるいは叡智の可視化も期待され、今後の日本の医療現場への変革も促すことになるかと期待される。今まで行うことができなかったエビデンスを創出することでガイドラインの発展にもつながり、よりよい現場の診療につながると考える。